岡豊風日

〈高知県立歴史民俗資料館だより・おこうふうじつ〉 第32号 1999年7月1日

黒潮が運んだ南蛮服
―企画展「土佐藩主の装い」によせて―

河上 繁樹

土佐藩主二代目の山内忠義（一五九二～一六六四）が着たという衣服のなかに、興味深い一枚のシャツがある。実のところ、シャツという言い方は正確ではないが、細長い袖の形は、見るからにシャツ風なのだ。その頃の日本のきものとは形態がまったく違う。当時の人はこれを「ジュバン」と呼んだ。今「ジュバン」といえば、襦袢つまりきもの用の下着を思い浮かべるが、もともと「ジュバン」はポルトガル語の「ジュバーノ」からきた言葉である。

十六世紀後半、ポルトガル人は大航海時代の波にのってわが国へやってきた。その姿は南蛮屏風に描かれている。大きな帆船から積荷を降ろす船員や街をゆくカピタンの一行。彼らは帽子をかぶり、チョッキを着て、だぶついたズボンをはく。そのチョッキの下に着た長袖のシャツが「ジュバーノ」だ。初めてポルトガル人を見る日本人は、その異装に好奇の目をむけ、やがて南蛮服が大流行した。「京都でポルトガルの衣服、もしくは（他の）何物かを持っていなければ人と思われぬようになった」とルイス・フロイスが述べるほど京では南蛮趣味がもてはやされた。カッパやジュバーノなどの南蛮服や、ラシャやビロードのような舶来の織物で仕立てた衣服を身につけることは最先端のファッションであり、大名たちのステイタス・シンボルともなった。

土佐藩主初代の山内一豊もラシャでできた南蛮帽子や陣羽織を好んだようで、その遺品が伝わっている。そして二代目の忠義も南蛮服と無縁ではなかった。なかでもジュバーノを手本にしてつくったかのようなシャツがおもしろい。これは甲冑の下に着込めた具足下着として用いられたようであるが、細長い袖の袖口にはボタンをつけ、ボタンホールまで開けられている。襟も立襟（たちえり）と呼ばれる襟元の詰まったスタイルで西洋風だ。その襟には奇妙なびらびらが縫い付けられている。おそらくこれはポルトガル人の間で流行していた襞襟（ひだえり）をまねたものであろう。だが、この服は西洋からの舶来品ではない。生地の白くつやつやと輝く緞子（どんす）は、中国製である。

慶長のころ、忠義公が土佐の海岸で難破したルソン船の船員を助け、手厚く保護をした。この船に乗っていた南蛮人が、お礼に服などを差し出したという。そんな出来事を伝えた古文書が土佐山内家宝物資料館に伝わっていると、同館の学芸員の渡部さんからうかがった。この具足下着はその時のものに違いない。土佐の南蛮ファッションは、黒潮にのってやってきた。

（京都国立博物館　工芸室長）

白地牡丹唐草文具足下着
山内忠義所用　(財)土佐山内家宝物資料館蔵

企画展

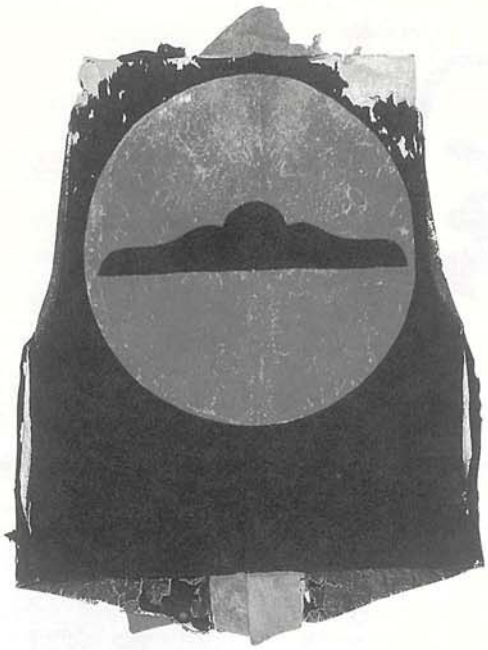
『土佐藩主の装い』によせて

［会期　平成11年8月6日(金)～9月19日(日)］

下村　公彦

はじめに

当館では、本年八月六日から企画展『土佐藩主の装い』を開催します。本展は、（財）土佐山内家宝物資料館の全面的な御協力のもとに実現の運びとなったもので、同館保管の装束類約三十点を参考写真パネル二十二点をまじえて紹介しようとするものです。歴代藩主のうちでは、特に初代一豊から二代忠義の頃の資料を中心に展示します。



日輪鍋蓋文陣羽織　山内豊秋氏蔵

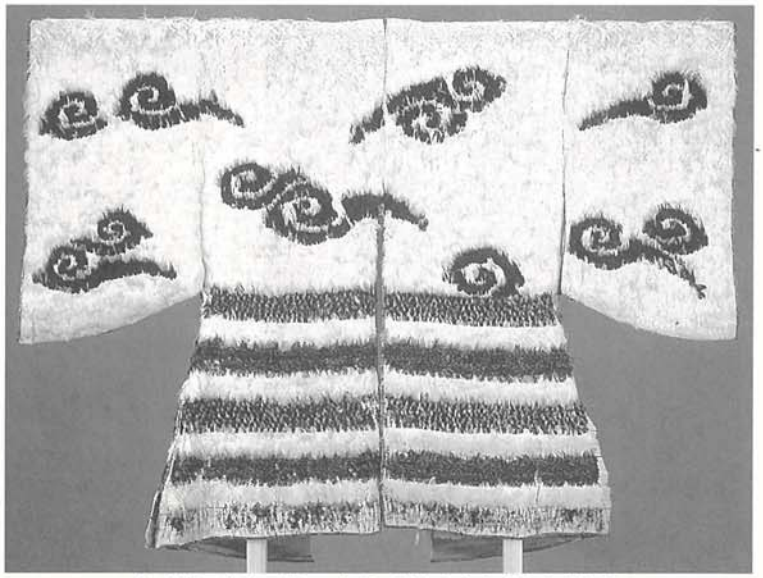
一、陣羽織

大名の装いといえば、まず「武の装い」が挙げられます。その代表例が、武将たちが鎧の上にまとった陣羽織です。これはもともと防寒防雨のための外衣でしたが、次第に戦場で自分の存在を誇示するための装いとなりました。戦場での存在誇示は、大将にとっては当然のことですが、配下の武将にとっても自分の働きを主人に確認してもらうために重要でした。それ故、華やかで個性的な陣羽織が多く用いられることになったのです。武装は武士の晴れ姿であり、そこには生死をかけた戦場で自己を精いっぱい飾ろうとした戦国武将の心意気も感ぜられます。

初代藩主山内一豊も戦国武将の一人でした。天正十三年（一五八五）一豊は豊臣秀吉から江北二万石を与えられ長浜（滋賀県）の城主となりました。その翌年の正月、彼は紙衣を着て秀吉のもとに参じました。それ以来紙衣着用は山内家の年頭の嘉例として定着したといわれ、一豊所用の紙衣陣羽織も山内家に伝存しています。

一豊の陣羽織の中で見逃せないのは日輪鍋蓋文陣羽織です。黒羅紗地に大きく緋色の日輪を切り嵌め、その中に黒羅紗の鍋蓋文を切り付けたもので、赤と黒の対比が鮮やかな佳品です。羅紗とは厚手の毛織物のことで、当時は貴重な輸入品でした。同じく舶来の白木綿を素材とした袖なしの陣羽織なども、一豊や二代忠義の所用品として伝わっています。

江戸時代も初期の頃を過ぎると、武力をもって天下を争う時代は終わりました。それでも、武の象徴としての陣羽織は、甲冑類とともに幕末に至るまで作り続けられました。中でも五代豊房所用の黒羅紗地三ツ柏紋付陣羽織や白繻子地二十三夜月文陣羽織は、大胆なデザインや色合いの美しさが目を引きます。素材が珍しいものでは十代豊策所用の鳥毛筋雲文陣羽織があります。これは白鳥毛地に黒鳥毛で雲文様や横筋を表したものです。また豪華さ、奇抜さといった点では、十五代豊信（容堂）の緋羅紗地数珠文陣羽織が圧巻です。これには容堂の豪胆な性格がそのまま映し出されているように思えます。



鳥毛筋雲文陣羽織　（財）土佐山内家宝物資料館蔵

二、具足下着・他

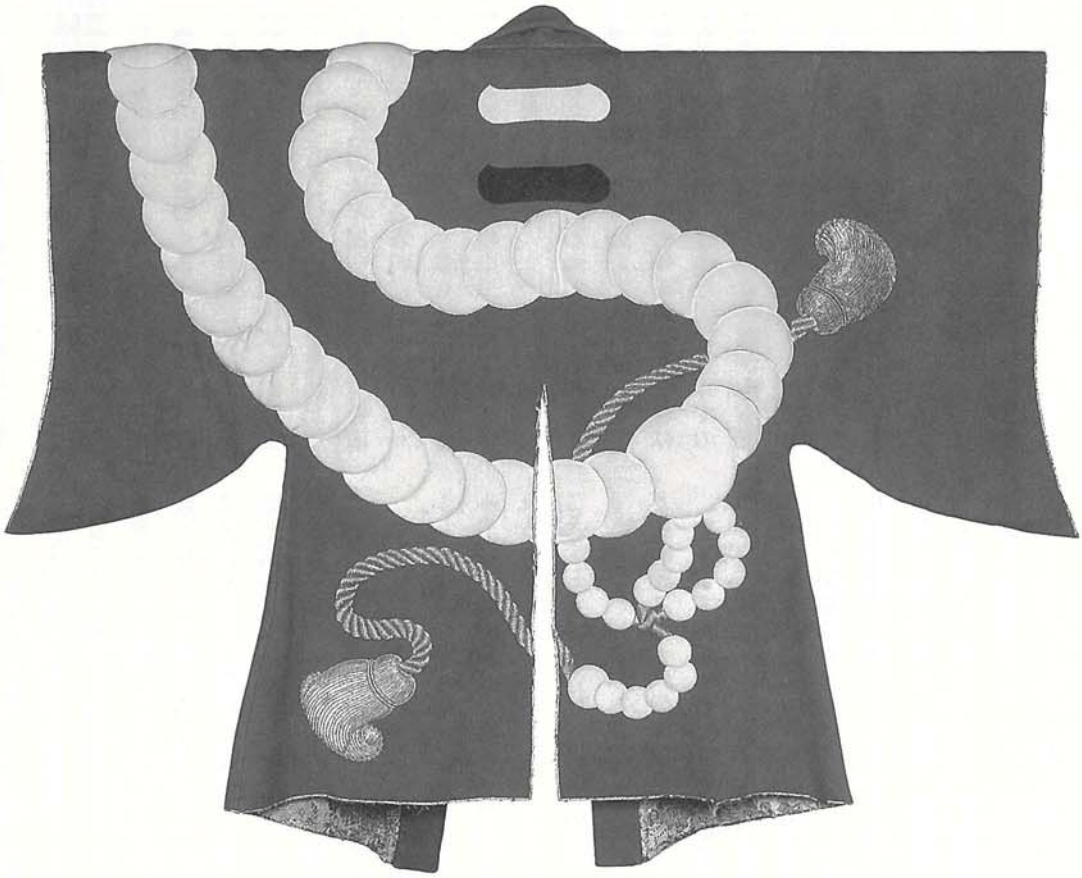
具足下着は、武将が鎧の下に着用するもので鎧下とも呼ばれました。形の上では、着脱や戦闘活動に便利なように筒袖状のものが多く、中には一頁で紹介されているような南蛮風の具足下着（忠義所用）もありました。

忠義所用の具足下着は九点も残っており、本展では右のほか白麻地三ツ柏紋付具足下着と柿麻地葵紋付具足下着を展示します。忠義は徳川家康の養女を室として迎え、慶長十五年（一六一〇）には、「松平」の姓も拝領しています。このため、葵紋付の具足下着が山内家に伝わったものと考えられます。

興味深いのは、豊策や豊信の具足下着の中に背に鉈文様が切り付けられている例があることです。武運を祈る精神は、伝統として幕末に至るまで受け継がれていたようです。

以上の「武の装い」のほか、本展では忠義宛ルソンカピタン書状など、山内家文書にみられる衣装に関する史料も展示します。また、熨斗目小袖や袴、火事装束、能装束も紹介する予定です。能装束以外はいずれも山内氏の家紋である三ツ柏紋や白一黒一紋（白黒一文字紋）が付いていますが、所用者は特定できていません。

パネル展示の部では、歴代土佐藩主の肖像画（下絵）や織田信長・豊臣秀吉ら桃山武将の陣羽織などを紹介します。写真での紹介ではありますが、今年重要文化財に指定されたばかりの名品猩々緋羅紗地違鎌文陣羽織など、貴重な資料写真を掲示します。こちらにも是非御注目下さい。

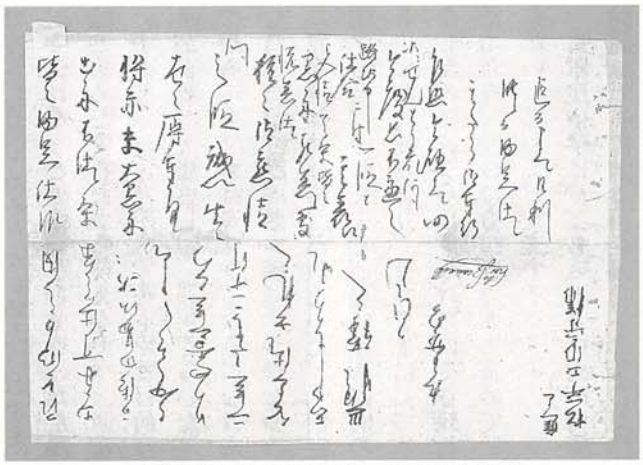


緋羅紗地数珠文陣羽織　当館蔵

おわりに

本展開催にあたり、資料の出品や資料写真の提供に御協力賜りました皆様に心より感謝申し上げます。また京都国立博物館の河上繁樹氏と（財）土佐山内家宝物資料館の渡部淳氏には準備段階から種々御指導頂きました。両氏には講演もお願いしておりますので御期待、御参会下さい。

なお、本展は展示面積の関係で一階企画展示室だけでなく、三階の近世コーナーの一部も利用して開催します。お見逃しなきようお願い致します。



山内忠義宛カピタン書状　山内豊秋氏蔵

坂本正夫新館長に聞く

平成一一年四月、当館は新しい館長を迎えました。坂本正夫館長（昭和八年高岡郡仁淀村生まれ）は、学習院大学を卒業後、三三年の長きに渡り高校教諭として勤める傍ら、休日を利用して民俗採集をしてきました。同職を退職後も精力的に民俗研究を続け、近年、『土佐の川舟民俗誌』『土佐の習俗　婚姻と子育て』などの著作を発表しています。民俗学を志したのは、若いころ結核を患い死を覚悟したときに出逢った本によってこれまでとは違った価値観を知ったためだということです。

就任間もない館長が、抱負や取り組んでいる研究について語ります。

■県民の財産をつくる

高知県立歴史民俗資料館については創設時に文化振興専門者会議のメンバーとして関わり、その後も注目してきました。開館してからの八年間、前館長の吉村淑甫さんは非常にいい方向に館を引っ張っていったと思います。私も吉村さんの路線を引き継いで、その上でさらに発展させていきたい。

吉村さんがよく言われていた文化史の研究が高知県全体で弱いということを私も感じています。いわゆる高尚な文化に限らず、生活文化を含めた広い意味での文化史の研究を深めていく必要があるでしょう。

館のあり方については、いくつかの面から考えなければならないわけですが、ひとつには高知県の歴史・考古・民俗を研究し、関連する資料を収集保存して後世に伝えていく施設であるということです。学芸員を中心にアカデミックな研究をして、県民の財産をつくっていく。

第二には、そうした研究の成果を展示や紀要、子ども歴史教室、史跡巡りや講座、講演会などによって県民にお返ししていくということです。

第三には、これは県民の皆さんへのお願いですが、それは、この館にできるだけ多くの方々に来ていただきたいということです。私がかつて教員をしていたから思うのかもしれませんが、特に次代を担う小・中・高校の児童生徒の皆さんに来てほしい。そのため先生方に率先して館を利用してもらいたいのです。この歴民館は、私たちの故郷・土佐を知り誇りを持つための絶好の施設なのですから。

そして、最後に私たち館員としてはわかりやすい展示や解説をし、「見にきて本当によかった。また行きたい」と思われるようなサービスをすることは当然のことでしょう。主体は県民なのですから。

■収蔵スペースの問題

開館して八年たって、いろいろ見直しが必要になっているように思います。常設展の展示替えや、企画展示室が狭いことなど課題が多々ありますが、その中でも特に収蔵施設については早急に考えなければなりません。資料を収蔵するスペースが少ないということは、館のあり方に関わる問題です。

かつては、何故あんな不便なところへ歴民館をつくるのか、と考えたこともありましたが、ここへ通うてみると、長宗我部氏の城跡である岡豊山は、近くには古墳や国府跡、国分寺などがあり「土佐のまほろば」といわれているように、まことにいい場所に思えてきました。今日のような車社会では、割合手軽に往来できます。直通バスも三便ありますし。

ただ箱としては、繰り返しになりますが、収蔵庫などの問題を抱えております。

■伝承・民具・文書

私は三五年ほど前から村歩きをはじめました。たまたま読んだ神島二郎や宮本常一の著作がきっかけでした。

その頃は高度経済成長期に入っていたけれど、土佐ではまだ村が崩壊しておらず、どこの村にもたくさんの人が住んでいました。そのため、面白い話を聞くことができました。

けれども、ただ面白いから、珍しい話が聞けるからということで歩いていたので、いい資料をたくさん集めたけれども、後でこれをまとめようとしても、ただ漫然と集めた資料だから使えない。

そのようなことから、テーマと目的意識が必要だと痛感し、一五年ぐらいたってからテーマを持って歩くようになりました。だが、私の悪い癖ですがひとつのことを調べ始めて、だいたい七、八割完成すると、それをまとめないうちに別のテーマに興味が移り、そのままにしてきました。これからは、それらのやり残したことを、一つでも二つでもまとめていきたいと思っております。

日本民俗学は、どちらかといえば信仰問題を中心に調査研究をしてきました。

私も勿論そういう方面に興味を持って調べてきたけれども、これからは民具のような「モノ」から民俗を見ていきたいと考えています。私が長年追っている農村歌舞伎の研究でも、舞台が残っている。モノがあれば、それからいろいろな情報が得られ、そこから分かってくることがあるのです。

現在では確かに民俗の伝承力は衰えているけれども、民具などのモノから入って行くと、明らかにできることがまだまだあると思います。私は今はカツオ漁を中心とした海の民俗をまとめています。それがすんだら、四国山地の生活文化を民具や技術の面から整理してみたいと考えております。

また、文書から攻めることも必要だと思い、最近は古文書を勉強中です。古文書が読めないから、フィールドへ出るという傾向があったけれども、これから民俗をやる人は古文書も読めるようになってもらいたい。『真覚寺日記』や『春秋自記帖』などにも、当時の庶民の生活が随分書かれています。

逆に歴史をやる人も、もっとフィールドへ出ると見方が随分変わってくると思います。そういう意味で、歴民館には歴史・考古・民俗の学芸員がいるので、それぞれの面から大いに研究をやっていくと面白いと思います。

■連携して研究する

民具については、ただ集めて置いておくだけではだめだと思います。県下には、民俗資料を収集している所が、七〇ケ所余りあります。せっかく集めたのに、放置して腐らせてしまうのはおしい。例えば広域市町村圏あるいは流域圏的な考えも入れながら、それらの民具収蔵施設が連携し、民具の保存と研究をする。こういうことが、各地の関心ある人たちと協力しながらできればいいなあと思います。

たまたま私が民俗学畑なものですから、民具の話が中心になってしまいましたが、歴史史料や考古資料も同じような問題があるだろうと思うんです。

まず県下にどれだけの資料があるのかを把握する。県立図書館、市民図書館をはじめ各地の図書館、山内家資料館とか龍馬記念館、美術館、文学館、埋文センターなど、それから自由民権記念館ですね、そんなところとも連携しながら考えなければならないことも出てくると思うんです。さらに大学との連携も考えていかなければならない。高知女子大には博物館学の講座もできましたので、尚更ですよ。

要するに排他的にならずに、お互いに連携しながら全体で資料の保存や研究を進めようということです。

■民俗学の行方

最近、民俗学の終わりということが言われています。けれど私は、民俗学は二一世紀になっても滅びることはないと思う。例えば、今の人は無信仰と言われるけれども、占いにこったり、新興宗教に走ったり、妙な噂話を流通させる若い人も多い。都市ほどそういう傾向にある。そんな中で、例えば俗信の研究が面白いのではないかと思います。俗信研究は桂井和雄先生が基礎を築きましたが、今は中土佐町出身の常光徹さん（国立歴史民俗博物館助教授）が、次々と新しい研究成果をあげています。

今までと同じようなやり方では行き詰まるかもしれませんが、現代社会を理解するために民俗学は有効な学問のひとつだと思います。

土佐の民俗的特徴ということについていえば、他所からの影響を無視することはできません。

現在、中土佐町ではカツオ漁を中心とした漁業史の研究書の刊行準備を進めています。その中で私は漁の民俗をまとめることになっていますが、そこには紀州や九州、さらに静岡、千葉、三陸地方との関わりも見えてきます。

また、大正時代末頃からカツオの群れを追って遠方まで出て行くようになると、それによって技術や習俗が変わっていく。例えば土佐のカツオ船は左舷釣りですが、静岡の船は右舷釣りで、そういった違いからトラブルが起こったりしている。

民俗は、変わらないものと、変わっていくものを見ていかなければならないと思います。

■歩きながら考えること

私は長年四国遍路を調べていますがこの遍路の神髄は「歩く」ということにあります。仏教には「座る」ことだとか、「唱える」ことが根本であるなど、いろいろなタイプのものがありますが、遍路はただ「歩く」こと、いつまでも歩き続けることなのです。

車遍路が増え、楽々と回ってご利益だけを頂戴するという遍路が多くなったが、最近また歩き遍路が増えつつあります。「眼が見えだした」「歩けだした」などということは、歩き続ける執念がそうさせるのだと思います。私も、できるだけフィールドへ出たいと思っています。歩いていると、いろいろな新しい発見があるからです。

文化史研究のことや収蔵スペースのこと、関係各機関との連携など、この館が開設された本来の目的を達成するための課題について、いろいろと考えをめぐらせ、館員とともに努力していきたいと思います。

（聞き手　中村淳子）

太鼓の稽古（ならし）

吉村　淑甫

暗い土間を通って裏口の方へ歩くと、そこが一枚の板戸になっている。その板戸を向うへ押すと畑に出る。仰臥（がが）のまま兼次さんはそう云った。その通りたどって板戸を押すと、秋の日射しをいっぱい浴びた菜園畑がぱあっと眼の前にひろがった。晩成（おそなり）のトマトが支柱を倒しそうにしがみついている。その畝の間を通って竹藪の方へ下りて行く。

藪の入口と思える辺りに竹の根が二本、少し弛（ゆる）んだかたちで横に這うて踏段のようになっている。それを跨（また）いで竹林のなかへ踏込んで行くと細い道がついている。しばらく歩くと急に視界が開け、上の空から縞目の陽光が射込んだ空地へ出た。

山本良水君はそこに居た。

彼は横倒しの朽木の上に腰を下ろして、鎌を手に両肘を張り、摺粉木（すりこぎ）ほどの大きさの素木（しらき）の棒をしきりに削っていた。彼の前には一丁の宮太鼓が置かれてある。太鼓は今にも崩れそうな古びた木枠の台の上に乗っかっている。

不意の闖入（ちんにゅう）者におどろいて良水君は鎌を振るう手を止めた。私はいそいで来意を告げた。

「お父さんから聞きました。太鼓の稽古だそうですね」

「ウン」

「それは、太鼓の撥（ばち）ですか」

「ウン」

太鼓台の脇にもう一本同じような素木の棒が置いてある。彼はまた棒を削りはじめる。

「一本無うしたケン、新規（しんき）にしよるが」

「何の木ですか」

「イッチイ。…イッチイの木でなけれや不可（イカ）ント」

イッチイには神木の称がある。その実は椎の実の倍ほどの大きさで、椎の実と同じように炒（い）って前歯で割って山の子どもたちが食べる。私たちが昔イッチイと呼んでいた木は本来のイチイ科のイチイではないらしい。私たちがイッチイと呼んだのはスダジイのことらしい。この可否はいづれ専門家に聞いてみることにする。

山本兼次さんは良水君の父親である。山仕事中に腰を打って、すでに一ヶ月余も寝込んだままだとのことであった。私が兼次さんを訪ねてきたのは、兼次さんが宮太鼓をよく打つ人で、昔の打法を伝えているということを聞いたので、それを尋ねにやってきたのだった。

仰臥のままの兼次さんの話はこうであった。

「今年の祭りには出レンようになったキン、息子の良が儂（わし）に代って打つことにした」

「良も、もう中学生じゃケン…」

そう云った後から又

「儂が口うるそう云うケン、裏の竹藪へ行って稽古をしよらあー」

兼次さんはそれ以上のことを云わなかった。

土佐の太鼓打法は、天保の頃（一八三〇―一八四三）窪田清音という下士侍が伝えたと云われている。陣太鼓の打方「三音略」というものを見たことがある。

兼次さんの太鼓が窪田清音の伝えたものかどうかもわからぬが、ともかく兼次さんの太鼓を聴いてみようとこの安芸郡の山中へやってきたのだった。

竹藪の中にもう一人闖入者があった。良水君の妹である。彼は妹の名をイサギと呼んだ。小学五年生だそうだ。イサギは頭髪を揺すって竹藪の中を躍るようにして駆込んできた。私がいたのでちょっと驚いたふうだったが、「ホイ！」といって片手に持った半切れ状のペーパー（紙ヤスリ）を兄に手渡した。

しばらくして良水君は新しい撥（ばち）で太鼓を打ちはじめた。同じ調子を何度も何度もくり返し、やがてそれが打てるようになると次の調子にとりかかる。

ドドドドドドドドドドドドドドドドのつづけ打が次第に高くなっていって止むと、次に

トン、トント、トン、トント

がしばらくつづく。やがて

トーン、トーン、トーン

となり、それが、トン、トンで切れ、次いで

トントントン、トントントンから

トーントン、トーントンとなり、最後にトン（トン）トン（トン）トン（トン）

と、二音目を小さくしてやがて乱調子になってゆく。

果してこの打法が古くからの打法であるか、又、「三音略」の打方につながるものかも判らぬが、確に一つの方向を持った打方であると思えた。

父の叱りの声をのがれて、裏藪の竹林で稽古（ならし）をしていた良水君の太鼓の音が昨日のように思い出される。

山本家はその後、山を下りて、良水君も都会へ出たそうだが、父親の兼次さんのその後は聞いていない。妹のイサギもどうなったか知らない。（文中姓名は仮名）

寄託資料紹介

伝香宗我部親泰の遺品
―緋羅紗地白武田菱紋付陣羽織―

（香宗我部一良氏蔵）

土佐の戦国・織豊期の武将たち。彼らは戦場や日常生活のなかでどのような装束を身に纏っていたのでしょう。

現在、絵画資料である長宗我部元親の肖像画（国重文、秦神社蔵）などを除けば、装いの実態を知る術は皆無に近い状況ですが、僅かに一点、元親の実弟で名門香宗我部家の養子となった親泰の所用と伝える陣羽織が今に現存しています。

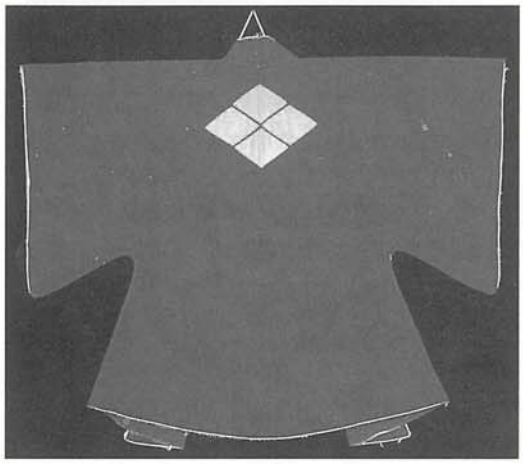
すでにこの資料については、平成六年度の開館三周年特別展「四国の戦国群像―元親の時代―」において展示・公開させていただきましたが、これまで染織専門家による資料自体の調査はなされていませんでした。

しかし、幸運にも次期企画展「土佐藩主の装い」の予備調査のため来館された京都国立博物館工芸室長河上繁樹氏により鑑定を受けることができましたのでその一部を報告します。

この陣羽織は典型的な桃山～江戸初期のオーダーメードと思われ、薄手の羅紗の一枚布を使用。全体的にゆったりとした仕上げで、袖の縁飾の簡素さや、家紋白武田菱の切付（アップリケ）の裏面処理の粗雑さは、製作年代を推定するヒントとなる。前襟には、唐物の白地牡丹唐草文金襴が使用され、陣羽織全体のアクセントとなっている…［略］。

依然として親泰所用の明確な史実はありませんが、資料的に桃山期まで遡れることが確認されたことは大きな収穫でした。文禄・慶長期には出征中の兄に代わって秀吉からの命令を直接受ける立場にあった親泰。発注したのはその頃でしょうか。

ちなみに本資料はご所蔵者のご好意により寄託の延長が認められ、来年度の夏の企画展「鉄砲と土佐」（仮称）において二回目の展示をすることになりました。ご期待ください。（野本）



体験学習室に市原麟一郎氏寄贈の民話文庫が登場！

このたび土佐民話の会の市原麟一郎さんより、何と約八八〇冊の民話の本を寄贈していただきました。

これは、昨年の「民話紙芝居」「民話の里めぐり」が好評で、今年は民家での紙芝居をシリーズ化し、「土佐民話の家」として3回実施することと関連したもので、紙芝居で関心をもってもらった子どもたちや、それ以外の人にも、いつでも民話の世界にふれてもらおうというものです。

『日本の民話』（36冊、未来社）『日本のむかし話』（48冊、日本標準）『日本の伝説』（18冊、教育図書）『日本の民話』（12冊、角川書店）『現代民話考』（11冊、立風書房）などのシリーズを始め、絵本をふくめさまざまな種類がそろっています。

残念ながらスペースの関係で全部を並べることはできませんので、雑誌『土佐の民話』のバックナンバーなど貴重なものは、資料室に保存されることになります。

第1回の「土佐民話の家」にあわせてスタートする予定ですので、どうぞご利用ください。

歴民スポット⑲　十二節

アジA「おーい、おれたちもう8年間もこうしてぶら下がっているが、なかなか腐らんのう」
アジB「そりゃそうよ、おれたちゃ作り物だもの」
A「あっそうか、道理で。じゃあ下のダイダイやユズリハもそうか」
B「そうそう、わしらは大月町などで行なわれる正月の作り物で、『ダイダイ譲る』というめでたい意味のあるものなのじゃ」
A「そうか。技術の進歩で本物そっくりじゃのう。」
B「それにしても、いつまでこうしてぶら下がっているのかのう」（ある日の民俗展示室にて）

カフェレスト 菜菜 ●営業時間 9:30～17:00

平成11年7～9月の催し物

●講演会●

午後2時～4時

聴講無料

葉書にてお申し込み下さい。
（定員100名。先着順）

☆8月21日(土)
「桃山武将の装い」
河上　繁樹 氏
（京都国立博物館工芸室長）

☆9月4日(土)
「幕藩政治と武家の装い
－山内家史料に見る衣服を
めぐる政治史－」
渡部　　淳 氏
（(財)土佐山内家宝物資料館学芸員）

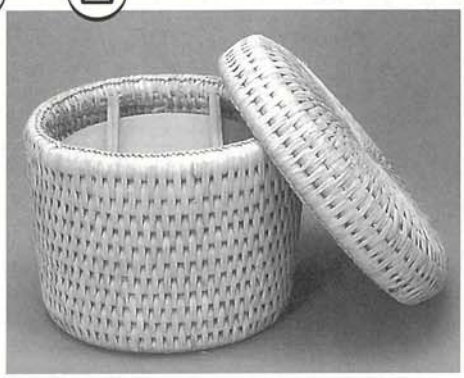
予告

『秋の企画展』

道具が語る食の文化

10月8日(金)～12月5日(日)

いろいろな素材の道具が食のために考え出され、用いられてきました。食文化の変化は社会の変化を映し出します。主に中世以降の土佐で使われてきた食に関する道具を展示し、人々の食に対する知恵と工夫を紹介します。



〈子ども歴史教室〉

☆7月24日(土) 土佐民話の家① こわい話

土佐民話の会の市原麟一郎さんの紙芝居で、土佐に伝わるいろいろな昔話や伝説を聞く『土佐民話の家』が始まります。いろりもある民家で、夏向けにこわい話が聞けますよ。

※午前10時、歴民館移築民家に集合。親子参加も可能。内容等詳細は電話でお問い合わせ下さい。なお、参加希望の方は、事前にお電話でご予約下さい。

図書販売情報

※平成11年7月現在

書籍名	価格	送料
常設展示図録	1,000	310
総合展示図録（日生）	800	310
企画展図録　寺田寅彦	1,000	310
企画展図録　死と再生の文化	1,000	340
企画展図録　四国の戦国群像	1,200	310
企画展図録　城田コレクション	600	240
企画展図録　四万十川－漁の民俗誌－	1,000	310
企画展図録　いざなぎ流の宇宙	1,500	340
企画展図録　歴史と美術－維新の群像－	600	310
企画展図録　昔のくらしと道具－大津民具館の資料から－	1,000	310
企画展図録　土佐・郷土史の父寺石正路の足跡	1,000	310
企画展図録　田辺寿男の民俗写真－ぼくの村は山をおりた－	1,500	340
特別展図録　考古速報展'96	1,528	340
特別展図録　秀吉と桃山文化	2,000	450
特別展図録　からくり－夢と科学の世界－	1,200	310
図書　ものがたり考古学	2,854	380
図書　土佐歴史の遺品Ⅰ	998	240

書籍名	価格	送料
図書　いざなぎ流祭文帳	1,800	310
紀要1　近世考古学と民俗学　岡本桂典他3編	500	240
紀要2　篠崎長之に送られた寺田寅彦氏の書簡　曽我満子他2編	500	240
紀要3　高知県香美郡野市町兎田八幡宮と絵画をもつ銅剣　岡本健児/岡本桂典他1編	500	240
紀要4　天の神論　梅野光興他2編	600	310
紀要5　明治十三年国会既成同盟大会とそのための国会開設願望書案について　矢木伸欣他3編	600	310
紀要6　幕末から明治期における堀見家の土地集積　下村公彦他5編	600	310
紀要7　筌の形態と呼称について　中村淳子他2編	600	310
紀要8　近世武家地主の研究　中島義人他3編	600	310

■郵便振込先
口座番号　01690-7-57940
加入者名　高知県立歴史民俗資料館

〔歴民館日録〕

月日	出来事
4・23	企画展「ぼくの村は山をおりた」開幕
24	子ども歴史教室「れきみん探検」
5・8	史跡めぐり「町並みウォッチングⅣ吉良川(1)」
15	講演会「山の変動と民俗」
6・5	講座「離村調査に同行して」
12	史跡めぐり「町並みウォッチングⅣ吉良川(2)」
26	子ども歴史教室「からくり人形を動かしてみよう」
27	企画展「ぼくの村は山をおりた」開幕

新職員の紹介

受付のニューフェイス

鍋島亜希子です！

この四月。満開の桜の中、歴史民俗資料館に勤めさせて頂くことになりました。

石積みの重厚な建物、ハイテクを使った展示室、企画展、出来るだけ多くの方に土佐の歴史に触れて頂きたいと思っています。

皆様の御来館をお待ちしております。

《ひとこと》

七月一日から高知カルチャーゾーンに加盟している各施設でスタンプラリーが始まります。ステキな賞品も用意していますので是非チャレンジしてください。（岡本）

今号は、坂本新館長へのインタビューと吉村前館長のエッセーを掲載しました。

岡豊風日（おこうふうじつ）第32号
平成十一年七月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783－0004　南国市岡豊町八幡1099－1
TEL　088（862）2211
FAX　088（862）2110
開館時間　午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は翌日）12月28日～1月4日、臨休あり。
入館料　通常期（常設展）大人（18歳以上）400円　団体（20人以上）320円　高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者（1・2級）手帳・障害者手帳所持者とその介護者（1名）、高知市及び高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・共和印刷㈱